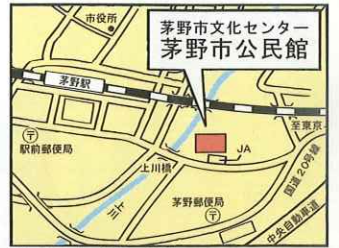


# 茅野市公民館報



茅野市公民館 ☎72-3266  
茅野市宮川4552-2

No.563 発行 長野県茅野市公民館 編集 広報専門委員会 印刷 (株)オノウエ印刷 発行日 2014年(平成26年)6月19日



ゆきどけ..... 1  
縄文土器に触れ、描いてみよう... 2~3  
公民館講座報告ほか..... 4  
芸術文化講演会..... 5  
審判講習会・茅野どんぱん..... 6  
地区行事結果・地区行事予定..... 7  
分館あらがると&ふるさと再見..... 8

『ホンモノの縄文土器に触れ、描いてみよう!』対話型鑑賞の講座で熱心に学ぶ子どもたち。(詳細は2~3ページ)

## ゆきどけ

横谷(よこたに)の渋川(しぶがわ)に流れ込む、落差15m位の乙女滝(おんなたき)の脇に、マイナスイオン指数二万の立看板があります。マイナスイオン

には、4つの作用があります。血液を浄化するとともに、血液のアルカリ化を進めたり、細胞の新陳代謝を活発にし、筋肉の活性を高め、内臓を健康にしたり、血液中のガンマグロブリンを増やし、からだの抵抗力・免疫力を高めたり、自律神経の機能を向上させ、内分泌作用や造血作用を亢進させたりします。

他に渋川でマイナスイオン発生の多い場所は、奥蓼科温泉郷明治温泉横の「おしどり隠しの滝」、そこから下流に、落差40m位の「王滝」、数十mにわたる「二枚岩」霧降の滝などがあります。これらに行くには、下流の乙女滝より上るルートと、上流の明治温泉・横谷観音より下るルートがあります。ただし、遊歩道は標高差が300m位あり、アップダウンが多く、砂利道で大小様々な石が転がっているため、靴はスニーカー程度が良いと思います。

芽吹きの新緑から、森林浴・秋の紅葉・冬の氷瀑と四季を通じて楽しめる遊歩道で、マイナスイオンを胸いっぱい吸い込んでみませんか。  
(湯田坂和成)

# 縄文土器に触れ、描いてみよう

茅野市公民館主催の美術を通して縄文文化に触れる体験授業、今年には「仮面の女神」国宝指定記念で5月25日、「ホンモノの縄文土器に触れ、描いてみよう！」を京都造形芸術大学附属康耀堂美術館、青少年自然の森を会場に小学校4年生から中学校2年生19名と市内の教育関係者2名が参加して開かれました。

## 今年の縄文アート

縄文プロジェクト構想の一環で今回、4回目となる「縄文時代と今をArtでつなぐ体験授業」は「ホンモノの縄文土器に触れ、描いてみよう」

う」をテーマに行いました。

講座は青少年自然の森で、縄文土器の鑑賞から始まりました。画家で同美術館を運営する京都造形芸術大学こども芸術学科の森本玄教授、北野諒同大アートコミュニケーション



▲康耀堂美術館での作品鑑賞

ン研究センター講師、守矢昌文尖石縄文考古館館長らが講師となり、実技指導を交えての実施になりました。

森本教授は「子どもたちの持っている感性は素晴らしいものがある。デッサンするときには

目で触るようにつかり見て描いてください」と指導。北野先生は対話の中から、子どもが土器を見て、手に持つて思いついた視点、感性をもとに鑑賞法を解説。守矢館長は縄文時代中期(約5000年前)の土器の文様の観察の仕方、ポイントを説明し、デッサンではそれぞれが指導を行いました。

午後は会場を康耀堂美術館に移して完成した作品の相互鑑賞と、同館で開催中の2013年度の京都造形芸術大学卒業制作展から選ばれた8名の作品13点と森本作品を展示した「はじまりの部屋」を鑑賞しました。

子どもたちが豊かな想像力で仕上げた作品は6月8日まで同美術館で展示し、7月1日から10日まで茅野市公民館に展示します。

## 土偶と現代芸術

諏訪地方の縄文時代の土製品と現代芸術が似ていることを最初に示したのは鳥居龍藏氏です。

1924(大正13)年に信濃教育会諏訪部会が発行した

「諏訪史第1巻」の第5章原始時代民衆の遺跡遺物との関係の中に、「厚手派土製作品と現代表現派との類似」「厚手派群の絵画」の2項を設けています。(注 当時縄文時代の遺物の多くを厚手派のものと考えていました)

「厚手派土製作品と現代表現派との類似」ではエコールド・パリ(パリ派)の芸術家として活躍し、

キュビズムの彫刻家として知られたオシップ・ザツキンやポリネシア民族の作品と土偶や顔面把手を比較しました。

鳥居氏は「厚手派の表現は、実物そのものの自由な表現というよりも、むしろ紋様化の分子が多くこれに加わっている」と有形の表現法に紋様化が大きな関係を持ち調和していることを指摘し、最も良い材料として尖石遺跡出土の土偶を取り上げました。

「厚手派群の絵画」では土器の文様について現代表現法



▲森本教授が一人一人を指導

のひとつに通じるものがあり「心の中に土器の何辺かを強く思っていたとすれば、その部分のみが力強く描き出さるのである。(中略)内部透視式の描写をしているのは、これ彼らがかく中心に見えたからであろうけれども、こんな画法は一般の描写としては決して行うことの出来ないものである。」と分析しています。

## 市内出土の土偶

今年、湖東中村の中ツ原遺跡から出土した、全身が完存